

Eureka XIII

六年制通信 No.37 令和8年2月20日(金)号

智恵は普遍

中学だったか高校の時か、いつ読んだのか忘れましたがイソップ寓話の中でも特に印象に残っている物語があります。洞穴に住むライオンのご機嫌を伺いにキツネが訪ねてくるのですが、入り口はかなり遠くから声をかけてくるのですね。ライオンはどうしてそんな遠いところにいるのか、入ってくればいいではないかと言います。キツネが答えて言うには、いや、洞穴に入っていく足跡はあるけれど出てくる足跡が見当たらないのでね。いかがです、この物語。なるほどキツネよ、賢いではないかと思いませんか。もちろん他にも「すっぱい葡萄」をはじめイソップ寓話は、短い話に込められた教訓に感心しながら多くの物語を読んできました。本を読んでいるのですが、なんだか目の前にイソップがいて私に語りかけているような、そんな気がしたものです。そして、学生になってイソップはアイソポスというギリシア人、しかも奴隷で、何と紀元前6世紀の人だということを知りました。そのとき、非常に不思議な気がしたのです。彼が生きたのは二千五百年以上前の異国の地です。しかし子どもの時に読んだイソップの寓話の数々は、例えば親戚に物知りなオジサンがいたとしたら話して聞かせてくれるような、そんな身近な物語に思えたのです。これは一体どういうことかと思いました。今の日本からは空間的にも時間的にもはるかに隔たりのある二千五百年以上前のギリシアで生まれた物語が、日本の子どもに面白く感じる事が不思議で仕方なかったのです。そう考えると『論語』を読んで感心しているのも不思議に思えてきます。孔子はBC551年に生まれたことになっています。やはり二千五百年も前、今度は大陸で活躍した人ですが、現代に生きる日本人の私が彼の言葉のいくつかを大切にしているというのは、考えれば面白いですね。

どこで生まれようといつの時代を生きようと、人間の考えることはそんなに変わらないのではないかと、そう思うようになりました。一方で科学技術の進歩に支えられ、文明の発達が目覚ましいものがあります。もう私たちは昔の生活に、例えばほんの50年前であっても、戻れないように思えます。文明は、文明がもたらした便利さは人間をひ弱にしている、とは誰が言ったのか忘れましたが、確かにそういう一面はありそうですね。また、昔よりも便利な機器に囲まれていると、今の人の方が昔の人よりも優れていると錯覚する小賢しいインテリ気取りがいますが、極めて愚かなことです。人間の知恵というものは、はるか昔に完成し、以後何も変わっていないのかもしれませんが、プラトンがBC427年の生まれでキケロはBC106年、セネカがBC1年ですから、やはり人間の叡智は二千年の時をもものともしないのですね。

あれは小林秀雄だったかと思いますが、バイオリンの例を挙げて一つの技術もある時期に完成してしまうと述べていたように思います。ストラディバリウスやガエルネリのことを言っているのですが、彼らの生きた17～18世紀に世界最高のバイオリンが作られ、以後それらを凌駕するものは現れません。ロケット博士の糸川英夫がストラディバリウスを超えてみせると宣言し、最先端の科学を駆使してセラミックス製のバイオリンを製作しましたが失敗でしたね。考えてみれば恐ろしいことです。17世紀には考えもつかなかった科学技術が、当時のほとんど手作業で作られたものに勝てないのですから。クラシックにしてモーツァルトが1756年、ベートーベンが1770年、バッハが1685年で、あの頃の天才が作ったものが今もなお人々を魅了し世界中で演奏され続けています。モーツァルトを凌ぐ作曲家は出ないのかもしれませんが。

最近セネカを拾い読みしているのですが、これも二千年前に書かれたとは思えないくらい「話し相手」になってくれます。プラトンは無理ですけど。セネカの酒嫌いはちょっと敬遠しますが、岩波文庫でほんの50頁ほどの名著「人生の短さについて」において強調しているのは「我々は短い人生を受けているのではなく、自分でそれを短くしているのである。人生を濫費しているのだ」と。ですから要するに、セネカの言いたいことは「寸暇を惜しめ」という言葉につきます。この簡単な言葉を二千年もの間語り継がれてきたわけですから、私たちにとって寸暇を惜しむことがいかに難しいかを表していると言っていていいでしょうね。確かに、「浪費する」のはお金か時間でしょうが、私たちはお金を使うのは慎重ですが、時間の無駄遣いには鈍感かもしれません。全く、この二千年もの間、ひょっとしたら私たちは全く進歩していないのかもしれませんがね。

今週のおすすめ

・伊与原新 『八月の銀の雪』（新潮文庫）

前にも同じ著者の『月まで三キロ』を紹介しましたね。今回は五編からなる短編集です。何と言いますか、エンターテインメントとしても十分楽しめるのですが、科学の知識が豊富な方なので読んでいて勉強になります。国際関係奨学プログラムのこととかシロナガスクジラ、伝書鳩、珪藻類、気象観測の風船など、私の知らない知識が豊富に語られるので楽しくなります。巻末に参考文献が挙げてあるのですが、まるで修士論文や博士論文の参考文献みたいな外国語の論文も載っています。作者は東京大学の大学院で地球惑星科学を専攻していたので、このあたり不思議ではないですが、一般には手が出ない文献ですね。以前NHKで「宙わたる教室」というドラマがあって、その原作者が伊与原さんです。私はこのドラマで伊与原さんの名前を知りました。それ以来何冊か読んでいますが、つまらないと思ったことは一度もないですね。

私はこの五編の中では「玻璃を拾う」が好きですね。珪藻の美しさなど見たこともないからわからないのですが、読み終わると見た気になっているから不思議です。ちょっと微妙な恋の予感などもあって、楽しく読みました。おすすめです。

BGMは Minnie Riperson の *Lovin' You* でした…。